

---

# 俺と世界と電視の力

レイアン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺と世界と電視の力

### 【Zコード】

Z2304W

### 【作者名】

レイアン

### 【あらすじ】

「嘘・・・だろ・・・」

それは一瞬の出来事。目や耳で認識することなく、身をもつて感じた。

自分に雷が直撃したと。

だが、不幸中の幸いが、生きていた。

そして、目が覚めたとき、見ることが出来たのは、天井と何かの数字、それと一緒にある矢印。

彼はそれが電気を見る力であると伝えられる。

そして、彼はそれを伝えた軍の大佐から、依頼を受ける。

一人の高校生が受けた軍からの仕事。

それをいつもと同じように受ける彼。

これは、普通とは違う生き方をしながらも、普通の高校生として日々を過ごす一人の少年の物語。

## プロローグ 異能が宿りし日

セミが一夏の命をかけて鳴くそんな真夏の日。

大型台風九号が大阪を直撃した。南の沖縄よりずっと東の位置で発生し、それはもう、見事なまでに大阪に向かって一直線に。

それによる影響によつて、当然ながら、暴風警報が出て、高校はもちろん休み。

俺は、突然訪れた休みを友人と出かけて、映画を見に行くことにした。

学校側からしたら、家で自習しとけという話なのだろうが、そんなことは関係ない。休みは休みらしくエンジョイしなければ。

しかも、風は強いが、雨は降るどころか、ところどころ青空が見えているぐらいなのだから、これを使わない手はない。

「これで、学校休みかよ。最高じゃねえか。なあ、黒瀬」

「・・・」

おや、返事がない。それにやけに静かだ。そう思いながら、左を見てみる。すると、そこには、自前のノートパソコンを使いながら、自転車に乗る俺の親友がいた。

使いながら？

普通なら、ありえない状況だ。だが、この場合、片手でやつてゐるのなら、まだ頑張ればうなづける。だが、こいつは違つた。さも当然のように、両手を使い、タイミングをしていくのだ。

「あの・・・。黒瀬・・・。お前、大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だぜ」

そう言いながら、道にある鉄柱なり、人なりを体を傾けたり、時には片手を使って、避けていく。やつの手は止まることはないし、ディスプレイから、目を離してもいい。

この場合、明らかに事故を起こしてしまつたら、やつの前方不注意が原因となつてしまつ。だが、なぜか、今のとこ

ろ、事故を起こしてはいない。本當なら、全力でとめるべきだろうが、こいつのパソコン好きはとめられない。

そんなことを思い出した俺は、あえて、何もしないことにする。

そんなふうに、事故の心配をしつつも、自転車を走らせていると、案の定、隣から何かに、衝突した音が聞こえた。

「おい、てめえ。前を見ないで、パソコンを見ながら、自転車とはどういうことだ」

自転車を止め、斜め後ろを見てみると、不良に絡まれる黒瀬の姿がそこにはあった。俺はすぐに、謝りに行こうと駆け寄るつとすることが、俺よりも速く動いたやつがいた。

黒瀬唯。名前から分かるように、やつと彼女は兄妹だ。普段、おとなしそうで、かわいらしい笑顔を振りまく彼女だが、今の彼女にそんな優しさやおとなしさは全くもつて感じられない。

今、彼女から感じられるのは怒り、いや、冷え切った鋭い殺気。

「お兄様に、けんかを売るとはい度胸をしていらっしゃいますね」「ああ、何だ、てめえは。部外者は引つ込んで！」

不良たちは、突然現れた邪魔者を排除しようと動き出す。数は三人。普通の少女なら、こんな状況を目の前にしたら、恐怖に駆られるだろう。

だが、唯の目には哀れなものを見るような蔑みの光しかなかつた。我ながら、他人とはずれていると思う俺から見ても、普通とは明らかに違う少女だと思う。だが、そんな外見は彼女にとつて、はつきり言って、どうでもいいことなのだろう。結局のところ、彼女にとつて重要なのは、目の前にいる兄に對して、無礼なまねをしたものどもを排除することなのだろうから。

彼女は、親指と人差し指の間に、パチンコ玉を挟み込んでいく。

それに、徐々に力を込めていき、一気に弾き飛ばしていた。不良たちに向かつて。正確には、命令を出したやつの顔をギリギリ掠めるところを。

男の顔には、一筋の血が流れる。怒りで我を忘れ、真っ赤に染ま

つた男の顔が、急激に青ざめていく。

もう、終わりだ。それを見ていた俺は、そう確信し、安心する。安心するって言つのは、相手から戦おうという意志が消えてくれたことに対するだ。

じゃなければ、俺が無理やり介入せざる終えなくなつただろう。かといって、今、介入しなくて大丈夫かといわれると、そうでもないのだが。

あの妹の怒りはまだ冷めてはいない。冷めるどころか、どんどん上がつてきている。そんな唯を出来る限り速く移動させるべきだと俺は判断した。なぜなら、そうしなければ、彼女の怒りがいつ爆発してもおかしくないからだ。

「黒瀬兄妹、行くぞ。そちらの皆さんもそれでよろしいですね？」選択肢は一つしかない質問を男たちに投げかける。

その問いかけに対し、男たちに出来たのは、ただうなずくだけで、声をだすことはなかつた。いや、発することができなかつたが正しい。しかし、それは当然のことだろう。

死の氣配を感じて、何事もなかつたかの「ごくいられるほうがおかしい。

そんな恐怖に支配された男たちをそのままにして、俺たちは映画館に向かつた。

ちなみに、唯の怒りはとつて、彼女の兄に諭されたことにより、映画館についた頃には完全に静まつていた。

見た映画は世界を魅了したファンタジー映画。なかなかの出来で、続編が出たら、見てみたいところだ。

最後に、スタッフホールが流れると、映画は終わった。

「次はどこに行く？」

映画館の天井にある明かりがつき始めたとき、俺は一人に対してそう聞いた。だが、返事はなかつた。

兄弟の方を見てみると、妹は兄の肩に寄り添つて、兄は妹のほうに頭を傾けて、どちらも爆睡していた。一人とも、安心しきつた幸

せそうな寝顔を見せていた。

この幸せな顔を見ていると、起こす気が半減されるわけだが、それでも、人がほとんど出て行つてしまつたので、起こすことにする。そして、そうしようとしたとき、兄の方は目を開き、起き上がつた。

「おはよう、夢二」

「おはよう、明。そろそろ帰るから、そこの妹さんを起こしてくれ」「いや、起こすのはかわいそつだう。こんなにもぐつすり寝ているんだから。俺が運んでいくよ」

「どうか、でも、大丈夫なのか?」

「ああ、両手なしでも運転できるからね」

「いや、事故を起こしていただじやないか」

「ああ、あれね。あれは、向こうが当たつてきたから、ぶつかつただけだ。あいつらは、俗にいう当たり屋みたいなものだう」

「そうか、わかった。でも、気をつけろよ」

「ああ」

ちなみに、今会話の大丈夫かという言葉には、妹さん起きたら、嬉しさのあまり失神するぞという意味も含まれていたのだが、気にしないことにしよう。

そして、俺たちは席を立つ。やつは、妹をお姫様抱つこと呼ばれる持ち方で静かに持ち上げる。そんな姿に色々思うところがあつたが、あえて、口には出さず、心の中にしまいこむ。

彼は三月生まれで、妹のほうは四月生まれということで、学年自体は一緒なため、そこまで身長差はない。だが、そんな妹抱えつとも、普通に歩いている友人の姿に俺は驚きを隠しきれなかつた。

もちろん、そんな異様な光景を見て、注意を引かないわけがないので、周りからの視線が痛かつた。だが、それは本来、明のほうに行つてはいるはずで、俺には関係ないはずなのだが、何故か俺に対しても視線が集まっていることが不思議でならなかつた。

そして、映画館を出ると、朝の天気が嘘のように見渡す限り、分厚い雲に空が覆われていた。

「お前、妹さん抱えて、先に行つとけよ。俺が妹さんの自転車も持つていいくからさ」

「いや、悪いって。そんなことさせちや」

「ひういう俺のたまにしかない善意はちゃんと受け取れ。それが俺からのお願いだ」

「・・・ああ、分かつたよ」

納得していない様子だったが、俺は気づいていない振りをする。そうして、両手に妹を抱えたまま、自転車をこいでいく友人を俺は見送った。

とりあえず、俺は唯の自転車が幸運なことに折りたたみ式だったの、小さくしてから、背中にひもで背負う。感想としては、思つていたよりも重い。その一言に尽きた。

ここから、家まで十キロ。これを背負つたまま、俺はたどり着けるのか、否、たどり着いてみせる。

そう決心して、気合で、こいでいく。こぐたびに、背中と足が悲鳴を上げる。こぎ始めて、もう三十分ほどが経過したが、まだ半分しか進めていない。だが、背中は今にも崩壊しそうだ。

疲れ果てて、息切れを起こしながら、こいでいると、雨が少しづつ降り出した。

「やばいな。ようやく、台風が働き出したか・・・」

小雨だったのは、ほんの一瞬で、すぐに大雨に変わった。朝から天気が良かつたので、傘など持つてきているはずもない俺はずぶ濡れになりながら、進んでいった。

無論、雷も鳴っていた。かなりの轟音。普通だったら、これが聞こえない人はいない。

だが、俺には雷の音が聞こえるわけではなく、そして、視界に雷を認識するのでもなく、全身に流れる莫大な電流を感じることしか出来なかつた。

俺に雷が直撃・・・したのか。

俺、死ぬんだろうなあ・・・。

すまない。明、唯・・・。

そう思いながら、俺の意識は漆黒の闇の奥底へと落ちていった。

## プロローグ 異能が宿りし日（後書き）

俺と世界と電視の力、スタートです。

この物語は、普通の高校生として生きつゝも、普通の高校生ではありえないようなふうに生きる少年の姿を描いたストーリーとなっています。

読んでいただいて、感想等ございましたら、お気軽に書いていただけます。どうれしいです。

## 反乱の兆し

俺が目覚めたのは、どこか白い天井があり、白い壁に包まれた部屋であった。見覚えのない部屋で、最初は死んだのだろうと思った。だが、意識がしつかりしてくるに連れて、自分がベッドに寝かされているのに気づいた。どうやら、生きているようだ。

「北井大尉、大丈夫か」

「はい、山崎大佐」

突然の呼びかけに心の中は驚きが隠せなかつたが、難なく乗り越えることが出来た。ベッドから起き上がり、敬礼をして、俺はそう言つた。もう慣れたものだ。普通の高校生なら慣れているなどありえないはずだが、俺は諸事情による軍配属により、慣れていた。そんな俺の目の前にいるのは、軍服に身を包んだ男だつた。

「元気そうだな、ならいい。医療班に全力を尽くしてもらつたからな。感謝しどけよ」

「そうですか、あとで、お礼を言ひておきます。大佐、一つ、質問してよろしいでしようか」

「何だ、話せ」

「目に何か異常を感じます。何やら、数字や矢印が見えますし」

そう、起きたときから、気になつていたこと。この数字と矢印。今、数字は百で矢印は左のほうを向いている。

「それは、医療班の検査の結果から見ると、異能だそうだ。具体的には、電気の流れ、および、強さが分かるらしい。そして、その異能の兆候が目だけではなく、全身のいたるところから、観測されている。だが、今、分かつてている効果は目の部分のみだ」

「ありがとうございます」

「今回、君をここへ連れてきたのは、この会話のためだけではない」「何かございましたか？」

「ああ、今、この大阪に、異能を持つ者たちが続々と集まりつつあ

る」

異能、軍に所属する者は、部隊として存在するため、知っているが、一般には異能の存在は隠され続けている。それは、異能の存在が世界をやがめかねないという政府の判断によるものだ。

異能が公式に認められてしまえば、異能を持ち、人より上に立った気分となる者も出てくる。たちが悪ければ、人を見下すという行為に至りかねない、それが政府の予測だ。

現在は、もし存在していても、異能保持者自身、周りから差別を受けてしまうことが目に見えているから、異能を隠そうとしている。そう、自分だけがそうなのだろうと思わされているから。だから、異能保持者自身が、公に使おうとしない。

だから、世界はまだ安定している。

これが、異能の存在が公のものになつたら、どうなる？

人を見下すで済んだらしいほうだろう。これは、俺の見解だが、第三次世界大戦が起きる。異能保持者たちの反乱が始まりしたものとして。

そんなことを露知らず、異能保持者たちは、集まつて、異能保持者の存在を公に知らせ、自分たちの存在を認めさせようとしているのだろう。おそらく、人数がそろえば、認めてもらえるとでも思つてているのだろうが、本当はその逆だ。

人は未知なる力に恐怖する。それが数が多くなるほど、大きな未知の力となる。それでは、認められるどころか、恐れになるだけだ。

「だいたい、状況が分かりました。おそらく、異能保持者たちの反乱目前といったところなのでしょう。ですが、どうしてそつなつてしまつたんですか？」

「察しが良くて助かる。だが、その原因に関しては、現在捜査中だ」だとするならば、俺は何故呼ばれたのだろう。そう考え出したら、俺のすべきことを思いついた。

「了解です、俺が呼ばれたのは、異能保持者たちの反乱の時期予測、

および、反乱の鎮圧といったところでしょうか

「ああ、そうだ。いつものことながら、話がよくわかっているな。まるで、私の心の中が読まれているようだ」

「いえ、そんなことないですよ。俺にもわからないときがあるのですし。とりあえず、了解です。情報が分かり次第、報告します」

「ああ、よろしく頼む。それと、夢」

久しぶりに本名で呼ばれた。久しぶりにといふのは、この人が俺の本名を呼ぶときはプライベートの内容のときだけだからだ。

「何でしようか」

「あせりすぎるなよ。まだ、お前は若いんだ」

「分かりました。とは言え、俺が進まなければならないのは事実です。そして、今はあせらなければならない時期です。では、失礼します」

俺はあえて、山崎の言葉の持つ本当の意味から目を背けた。だが、それはたとえ、どれだけ目を背けたとしても、迫つてくるものだと俺は知っている。

だとしても、俺は目を背けたかった。目を背けたら、いつか消えてくれるのではないかと思つて。

そう言って、一礼し、俺は山崎に背を向けると、自動式のドアから出て行つた。

## 遠距離ゲート

だが、その自動ドアを抜けた先はよく見慣れた俺の玄関だつた。突然のことに驚いて、後ろを見る。すると、ドアの向こうには佐原大尉がいて、笑いながら、こっちを見ていた。

「試作機としては上々の出来栄えじゃないの？ これ、なかなかいい作品だと思うわよ、北井大尉」

通りすがりで目撃したら、十人が十人振り向くほどの美人さんが、微笑みながら、腕に巻いた機械を指しながら、言う。

最初に会ったときは、こんな一つ一つの仕草にビキビキさせられたものだが、今は見慣れたことによって、大丈夫になつた。

そして、そんな彼女が腕に巻いている機械は、試作品として作つてみた遠距離移動用のゲートを作る機械で、そろそろ、実際に使ってみてもらおうかと思っていた品だ。

おそらく、まだ、エネルギー供給の部分が不完全だから、充分な動作はしないと思っていたのだが。

なんと言つても、部隊の長である大尉だ。エネルギーの量は一般と比べても、はるかに違う。そもそも、そのエネルギー量の多さも大尉の任命条件でもあるから、普通と比べやいけないのかもしだい。

エネルギーの供給不足で、動かない可能性もあると考えていたが、まあ、この人のエネルギー量から考えれば、当然の結果だろ？

「いえいえ、まだ、それは不完全な品ですよ。あなただからこのゲートを維持することが出来るが、他の人は無理だ。まだ、エネルギー供給のところが修正すべき点があります。ですが、ここまで、安定してゲートを開くことが可能というのも、結果としてはいいものですね。ありがとうございます」

あごに手を当てて、少しだけ考える大尉。だが、それはほんとに少しの間だけで、会話が途絶えることはなかつた。

「ふーん。でも、これはこれで、相当なものじゃないの。正直、これだけのものを維持しようとすれば、これぐらいのエネルギーは必要なのは当然だろうし。こんな試作品を作り上げて、問題点を解決できるような口ぶりで話すあなたはすこいわ」

「ありがとうございます。わざわざ、俺のためにゲートを開いてもらつて。でも、まだ、不完全な品なんで、そろそろ、こことのゲートのリンクを切つてもらえると嬉しいです。まだ、そこまで、無理はさせたくないの」

「ええ、わかつたわ。あなたがそつまつなのなら。じゃあ、这样なら、そして、おやすみなさい」

「这样なら。そちらも、おやすみなさい」

「そうお互いに言つと、ゲートは閉じられた。そこに広がつているのは、もう、いつもの玄関。ゲートがあつたなんて、痕跡は微塵もない。それを確認してほつとした。

「原理的にはOKか。だとするなら、残りの問題はエネルギー面だ。だが、ここで、考え始めたら、徹夜確定だつから、今日はとりあえず、ここまでにしておくか」

「とりあえず、ここまでと区切りをつけたことある。それを考えるのは、また今度だと。」

そこで、俺は玄関にいる」と云氣づく。

「ただいま

「おかえりなさい、夢一さん」

そう言って、声をかけてくれたのは、仕事で、俺とは別居している両親に代わって、ときどき家まで料理を作りに来てくれたり、掃除しに来てくれたりする心優しい後輩の加藤麻利。

「ああ、ただいま」

「そういえば、夢一さん。昨日から学校休んでたみたいですが、どうしたんですか？」

「ああ、雷が俺に直撃して、死に掛けた」

そう告げると、彼女の顔から血の気が引いていく。それはもう、ほんとに心配している顔で。

「あわわわわ。だ、大丈夫なんですか。ど、どこか、お怪我は、異常が見られるのであつたら、言ってください」

「ああ、大丈夫だよ。異状つて言つても電気が見えるようになつたぐらいだし」

彼女の顔に、徐々に血の気が戻つていい、蒼白だった顔も、いつもどおりに戻つていつた。

「良かつたです・・・。電子の王とまで呼ばれている先輩に電視の力なんて、鬼に金棒つてやつですね」

「電子の王つて、大袈裟な。俺は、趣味でやつたものを公開してるのでなんだから」

「その素晴らしさゆえに、あなたはネット上ではその名で呼ばれているのですよ。突如現れた顔を全く表に出さない無所属の開発者。名はルシフェル。だが、それも、ネットで出しているだけのネームに過ぎない。そして、電気の関わる品であれば、彼の作るものに勝るものはない」とまで言われるようになった

それは知っているが、さすがにネットって言つのは、大袈裟に扱いすぎだと思う。単に、趣味の作品を公開しているだけなのに。

とりあえず、次の公開作品は、多分あのゲートに決まりだらうな。あのゲートは、異能の力をエネルギーとして取り入れることも出来るし、電気を使って動かすことも出来るから。

まあ、表に出す上では、電気で動くというふうにしかしないが。「すまないが、俺腹ペこなんだよ。すぐに準備できるか?」

「ええ、というより、もう出来上がっていますよ。今回はカツカレーですよ。試作品が出来上がったと聞いて、それのお祝いです」

そう、彼女にだけは一番最初に試作品が出来上がったことを伝えていた。

実を言つと、今回のものはどんなものを作りつかと考えているときにアイデアをくれたのは彼女であつた。

学校まで、家から直で学校まで行けるようにならないかなというさやかな彼女の言葉が今回の品のきつかけだつたのだ。

だから、完成品ができたら、彼女にプレゼントしようと考えている。ちなみに、完成品というのは、表に発表するものではない。表に発表するのは、エネルギーとして各家庭に流れている100?電源が必要なものであるが、俺自身の理想としては、乾電池で動かせるようにしたい。

それを渡そと考へてゐるのだ。

「まだ、試作品とは言え、今、使ってもらつたが、どうやら成功みたいだ。あとは、エネルギー供給の問題解決をして、麻利用に使いやすくするだけだよ」

そうこう言つてひたすら、リビングにたどり着く。リビングにはちゃぶ台のような食事のための台と、テレビ関連しか置いていない。

これが、俺の家だ。基本的に作業は家ではしていないので、散らかることもない。ついでに言つと、散らかるよつなことは、彼女がいる時点で有り得ない。

彼女は根っからの綺麗好きだ。もし、片付いていないとか、汚れているとかあつたら、自然と綺麗にしてしまうほどなのだ。

「いつも、ありがとう」

座った俺は、カレーを渡してくれた彼女にそつまづ。「いいえ、気にしないでいいですよ。私がしたいと思つていてるからしていいんです」

彼女の気持ちが分からぬほど俺はバカではない。というか、去年の冬、告白された。だが、俺には、女人との接し方が分からなくて、今はまだ、返事を待つてもらつてている状態なのだ。

そもそも、女人の人に限らず、人とまともに接したことさえ少ないので。親はというと、仕事で小学生のときからずっと別居しているし、友達はというと、自分で家の生活を全てまわさなければならなかつたので、まともに遊べなかつた。それゆえに、俺は家に引きこもりがちだつた。

そこで、出会つたのは、回路やプログラム。パソコンの仕組みはどうなつていてるんだろうとか、ゲームの仕組みはどうなつていてるんだろうと調べ始めたのがきっかけだ。

回路やプログラムは忙しい俺でも、家でできることができるということで、親しみを覚えたのだ。

そして、中学生の頃、彼女と出会つた。俺は中学校で立ち上げた電子情報部で。気合と根性で立ち上げたはいいが、入つてきたのは、彼女だけだつた。

彼女に何故入つたのかを聞くと、

「それは秘密です」

というふうな一点張りで、結局答えは聞けなかつた。

それから、俺が卒業するまで誰も入つてくることはなかつたわけだが、俺と彼女は一人で楽しく活動をした。

部員の数が少なすぎるということで、かなり問題にされたが、活動における成果を発表することで、その問題は自然と消えていった。それなのに、何故、部員が来なかつたかというと、一人で突っ走

りすぎたからみたいだ。はつきり言つて、顧問も理解できていなかつたらしいし、その時点で普通の中学生ではなかつたのだと、振り返つてみるとと思つ。

こうして、今に至るわけだが、普通の会話は出来ても、まだ、恋とかそこらへんは全然無理なのだ。

俺自身、彼女に対して、何か思ひがあるのは感じる。だが、これが、どういうものなのか分からぬし、その段階で返事は、と思つたのだ。

だが、彼女が俺にとつてかけがえのない大切な人であるといつことは彼女には伝えている。そんな俺の事情を知つていてるからこそ、彼女は待つてくれているのだ。

俺の返事を。

電子の王と呼ばれている俺も、一端の人間。こうこうのには弱かつたりするのだ。

そうこう考へながらも、俺はカレーを食べ始めたのだった。

## 電子H（後書き）

すみません。作者の事情により、かなり更新が遅れてしまいました。  
今後としては、来週はたぶん更新なしで、再来週には更新をせても  
らおうと考えています。  
これからもよろしくお願ひします。

スプーン片手に、テレビのリモコンを手に取り、テレビの電源をオンにする。そして、チャンネルを変えるのは後にして、とりあえず、カレーを口の中に放り込む。

「うまい」

その一言に呑みた。これは、市販のものでは手に入らない紛れもない彼女がトレンドしたカレーだ。俺の好みに合わせた辛味、そして、ジャガイモ、にんじんといった野菜たちのお互いを認め合つて合わさつた旨みが絶妙な味わいをもたらしている。

「喜んでいただけて、嬉しいです」

カレーを一口一口味わいながら、目をテレビへと向けると、映っていたのは、近頃起きていたる電車やビルの壁に対する落書きに関するニュースだった。

「これは、学校でも話題になっていますよ。それにしてもおかしいですね、日本語でも、英語でもない。そして、該当する外国語も見当たらない文字なんて。まあ、字が汚くて、崩れてしまつてはからつてのが通説らしいですけど」

「確かに、俺もそうだと思つ。他の説として、宇宙人とか古代の未知の文明の文字だなどと言つてゐる学者もいるが、それはまず有り得ない」

「けど、何かがおかしい氣がするんですよ。全部同じ文字で、それも、全国で発生している。同じ犯人という可能性もあつたけど、同日に行われたとされるものまで出でてきているし、何か組織的な動きを感じるんですよね」

時々、彼女は鋭い。実のところ、同じことを思つていた。明らかに組織的動き。それに、大佐が言つてゐる異能の集団が集まつてきているという事実。

さらに言つなら、彼女には負担をかけたりさせるのが嫌だったか

ら、本当のことは言わなかつたが、俺はある文字のことは知つてゐる。魔法使いの血を持ちながら、魔法使いであることをやめた者が、使用する文字。

魔法文字の一種で、言つながらば虫種。その魔法文字は、そいつらにしか理解できない。ゆえに、普通の魔法使いにも理解は出来ないし、その存在自体知らないことが多い。

だが、俺はその文字を知識として存在は知つていた。意味は分からぬのだが、あれがそれに該当することぐらいは分かる。

そこらへんを踏まえると、ここ大阪で何かが起きようとしている気がしてならなかつた。

「気のせいだろ。確か三年前にも似たような事件があつたけど、何も起きなかつたじゃないか。今回もそれみたいな感じで、何も起きないだろ?」

これは、彼女を納得させるための口実。この件にこれ以上踏み入らせないようにするための言葉。

だが、これも事実であることに変わりはない。

「確かに先輩が言つとおりですね」

どうやら、納得してくれたようだ。まだ、何かが起きると決まつたわけじやないから、これは保険だ。

そう、何かが起きてしまつたときのための。

## 二つもとは違う夜

そして、カレーを食べ終えた俺は、食器を洗おうとする。だが、それを見た彼女は黙つてはいなかつた。

「先輩、いいですよ。私が洗いますから」

「いや、いいよ。たまには、自分で洗つておかないとお前がいないと駄目なダメ人間になつてしまつ」

「それなら、別にダメ人間になつてくれた方が嬉しいです」

俺の返しに対し、繰り出された危ない呴きに何か言わなければならぬ気がしたが、ここで言い出したら、おそらく、きりがないので、聞こえなかつたことにする。

そして、スポンジに洗剤をつけ、泡を立てて食器を洗つていく。そうして、洗い終えた食器を置いていくと、彼女は俺と話をしながらも、その食器を拭いていく。

どうやら、食器を拭くことで納得してくれたようだ。そして、その協力のおかげか、そこまで時間をかけて、後片付けは終了した。

「じゃあ、先輩、私はここで失礼します」

「ああ、いつもありがとう。今日も家まで送つていこうか」

そう言つて、玄関まで一緒に歩いていく。

「いえ、今日はいいです。今日は、先輩の開発した試作品を使って、  
帰りたいです」

「いや、あれはまだ、試作品だから。まだ、無理だ」

予想外の答えに心中では驚きはしたものの、表には出さず、冷静に対処する。

「だからこそです。先輩の理論によつて、作られたものが完璧であるということを私の身をもつて証明したいのです」

顔を近づけて、押し切ろうとする彼女。そんな彼女はもつていても聞かないことを知つてゐる俺は仕方なく、了解することにした。

「ああ、わかつたよ」

そう言って、試作品を取り出すと、彼女に手渡す。形状としては、カチューシャのような感じであるが、頭につけるのではなく、首につけるタイプだ。

通常は内蔵バッテリー使用しなければならないのだが、彼女には必要ない。

なぜなら、彼女は古代から続く血筋で、魔法使いなのだ。それゆえに、この機械に流し込むためのエネルギーの生成を自身で行うことが出来る。

何はともあれ、エネルギーを流し込んだら、声に出して、移動位置を指定するという方法か、行きたい場所を思い浮かべることで、行き先を決めるという方法のどちらかで、目的地まで行くためのゲートが開く。

「では、さよなら、先輩」

起動ボタンを押した後、ゲートを開くと、彼女はそう言った。

「ああ、じゃあな」

それに對し、彼女は向こうで手を振りながら、ゲートを閉じた。どうやら、今回も問題なく動いたようだ。

今の時間は21時。

まだまだ寝るには早いし、これからどうしたものか・・・。そんなことを考えていると、携帯電話の着メロが響いた。

だが、その着メロはメールが来たり、電話のときとは違うものだつた。

俺の製作した防衛ネットワークの第一防衛に引っかかったことを知らせるメロディー。

それが、今響いたものなのだ。一応、千にも渡る防衛をしいているため、今、第一防衛ならば、すぐには問題はないのだが、放つておいてやるほど、俺は甘くはない。

相手はハッカーやウイルスといったところだから、油断はならないし、何をして構わないだろう。

「さて、久々にやらせてもらおうかな」

もつぱりて、パソコンの前に座る俺の顔には、笑顔しかなかつた。

そして、次の日の朝。いつもより、起きるが遅くなってしまった俺は、軽く身支度を済ませ、食パンを口に放り込むと、足早に家を出て行った。

家から走ること十秒。待ち合わせ場所に着くと、麻利が待っていた。

一応、時間としてはジャストだったが、麻利は十分から二十分ほど前にここに来ているのが、ほとんどのため、待たせてしまつたという罪悪感が俺の中にはあつた。

「すまない、遅くなつた」

「まだ、遅れないじゃないじゃないですか。今がちょうど、七時三十分ですし」

自分は待つてているといつのこと、それがなかつたかのようになつてくる麻利。そんな彼女の姿を見ると、本当に申し訳ないといつ気持になつてくる。

「でも、先輩、いつもなら十分前に来ているのに、今日はどうしたんですか？」

そんな暗くなつた俺に、気をつかつてか話題を振つてくれた麻利。そんな彼女の気遣いを無駄にするのは、逆に失礼だといつことぐらいは分かるので、俺はその話題にのることにする。

「ああ、ハッカーが俺のパソコンに対し、ハッキングをかけてきたから、返り討ちにしていたんだが、気づいたら四時だつた」

「先輩も無茶しちゃダメですよ。ていうか、先輩、朝四時に気づいたらなつていたつてのは……。一体、どれぐらいやりあつてたんですか」

「確かに、二十一時くらいから戦つていたから……。だいたい七時間か。」

「先輩とそこまでの時間渡り合つなんて、すごいですね。そのハッ

カーも」

言われてみて気づく。確かに、今回のは大物だった。

一年前、軍の情報局で少佐にもなるような人が訓練および俺に対する試験で、俺の家に勝手にハッキングしたみたいだけど、そのときは確かに、第五層目に入ったところで、そんな少佐であることなんて知らずに、返り討ちにした気がする。

それに対しても、今回のやつは十層まで突破してきた。

だが、ここで驚くべきところは、そこまで突破してきたことだけではない。それよりも、そこまでの攻撃をしつつも、俺の自動反撃プログラムを含む攻撃を、第十層まで耐え抜いたということに驚かされた。

「確かに。今回のやつは軍にいた少佐を裕に越えていたから、相当なものだよ。本当に、久々に白熱した戦いだつたな」

「先輩が認めるほどってことは、本当にすごかつたんですね」

「まあ、そいつのパソコンは今頃、俺との戦いに敗れたせいで、大変なことになつていいだろうけどな」

「ふふつ。さすが、先輩ですね」

俺の防衛ネットワークに組み込まれている反撃プログラムは、相手のパソコンをソフトウェア、つまりはプログラムの面から破壊するものだ。

そして、そのプログラムによる反撃を防ぎきれなかつた場合は、パソコンは起動不可の状態まで陥れる。それが、俺のパソコンに存在する触れてはいけない竜の逆鱗の一端だ。

まあ、さすがに俺のパソコンを攻撃して来たやつに対しても、無差別に反撃プログラムが襲い掛かるのは、あまりにも残酷なため、第五層までは単に、突破が厳しい防衛だけのプログラムで構成しているのだが。

「じゃあ、行くか」

「ええ、行きますか」

そうして、俺たちは歩き出した。ちなみに、まだ、時間には余裕

はあり、そこまで急がなければならないわけではない。

だが、俺は昨日まで入院していっていたのだ。メールで伝えたとは言え、まだ友人たちには心配をかけてしまっている。だから、少しでも早く会って、安心させたかった。

それゆえに、俺は立ち話を、歩きながらに切り替えたのだった。

そうして、歩くこと十分。俺の通っている高校にたどり着いた。校門をくぐり、校舎に着いたところで麻利とは別れ、俺は自分のクラスに向かつて歩いていった。

そして、自分のクラスに入つてから受けた一言田は

「やあ、夢一」

「まだ、死んでなかつたのですか」

「おい、聞きたいことがあるんだがな。何故、体育という科目がある？」

「なんでだろうか。まともな反応と呼べるよつたものを明しかしていない。あの明だけだしかだ。確かに、他の面子もおかしいことは、出会つたときから分かつてはいる。だが、ここまで、おかしいことは思つていなかつた。

いや、もしかしたら、俺が入院していたのが嘘で……。

「なわけあるか！」

「どうしんだ、夢一？」

「やはり、仮病か

「答えてくれよ」

それでも、普通に会話を何事もなかつたかのように続ける一矢。それは明らかに兄と他人との態度が違う明の妹と、佳山明彦と呼ばれる完璧に室内系の男だった。

まあ、唯のその毒舌が俺の心を読み取つたかの「」とさるものであつて、少々驚かされたわけだが。

「まあ、いいや。とりあえず、おはよう」

「おはよう」

「おはよつ、」

「ちーす」

それだけは統一性がある」とて俺はもう何とも言えなかつた。そ

の後も、唯の毒舌と佳山の脈絡のない話は続き、気づけば、授業開始の時刻へとなっていた。

それは、この学校において担任とはいえないものだからだ。会うのは、その担任が持つ教科のみ。

無論、朝の短いホームルーム（HR）はあるわけないし、教育相談といったものも、年に一度だから、まともに話すのはそれだけだといつても過言ではない。

そうして、気づいたら、いつものように教科担当の教師が来て、授業が始まった。

それからは、佳山は睡眠、唯はノートをとつて、まじめに授業を受けていた。そして、その兄はとくに、机の上にはんだごてという回路を作るために使用するための道具を用いて、何かいじつていた。

明らかにこれはおかしいことだ。言つては駄目かもしれないが、寝るまではまだ分かる。だが、どうやつたら、はんだづけという回路作りに発展するのだろうか。といつより、電源を引っ張つてきているのだから、いわゆる盗電というもののなのだろうが。

だが、そのどちらをも凌駕する問題がそこには存在した。それは至極簡単なもの。何故、教師がそれに対し、何も言わないのかだ。気づいていないわけではない。いや、確實に気づいてはいる。なぜなら、机の上で堂々なのだから。

それを教師は何も言わないまま、授業終了のチャイムが鳴ると、何事もなかつたように、教師は出て行つた。

「明、お前、何故、授業中にはんだづけしているんだ？」

「ああ、そういえば、夢一はいなかつたのか。えつとな・・・」

それからの説明を要約していくと、こんなものだった。

明は授業中にいつもと同じように、本を読んでいた。だが、それがついにばれて怒られたらしい。そのときに、「冗談だろうが、テストで満点とつてからにしろと言われたらしい。

それに対し、明はこう返したのだ。

「じゃあ、皆さん教師で私に対して、テストを作ってください。それで、満点取れたら、文句はないですよね？」

「ああ、いいだろう」

その態度に教師は苛立つたのか、そんな約束をしてしまったのだ。そして、その一日後、教師は各自の全力を出して作ったテストを明の前に持ってきたのだという。

「では、これを今から、百分の間に全てを解き、答えが合っていた場合は、授業中何をしても文句は言わない。それによる授業態度の減点を行わない。もし、満点じゃなかったら、授業中一切こんなことはしないようにしましょう。それで、よろしいですね？」

「ああ」

それは、実際のところ、大学院生でも解くのが難しいとされるものだつたらしい。それは、言つてしまえば、大人げないわけだが、それでも、授業をまともに受けない生徒を更生させたかったのだろう。

だが、彼らは知らなかつた。明の底に眠る知識のデータ量を。

「解けました」

「よし、いいだろう。一時間ほど、ここで待つていろ、採点をここで行つ」

だが、自信ありげだつた教師は、絶望した。なぜなら、難癖のつけられるようなところすらないほど、完璧な答えたのだ。それは、もう、高校生ではなかつた。

「お前・・・。一体何者なんだ?」

「僕は、単なる一人の高校生ですよ」

そう答えて、明は帰つたのだという。それ以降、何をしても文句を言われなくなつたのだという。

「おいおい、お前。先生に勝つたのかよ・・・」

「ああ、そうだよ」

そんな軽々しい答えに俺はもつ言葉も出なかつた。

## 教師 VS 生徒（後書き）

今回、教師 VS 生徒ということで、面白いバトル（？）を描かせてもらいました。

普通なら、有り得ない。

そんな小説ならではの話でありますながら、もしかしたら、有り得るかもと思わせるような話となりました。  
まあ、こんなふうに負けてしまったら、教師も何もいえないだろうなあとが思いつつ、執筆に戻ろうかと思います。

これからも、よろしくお願いします。

## ランチタイムといつづの戦

そして、同じじよつて一時間目が過ぎ、気づいたら、昼食時になっていた。

午前中の授業は、佳山は睡眠、明ははんだづけ、唯はきちんとノートをとるところづぶつで、全くもって変わりはしなかった。

無論、明のしていることは全教師が完全なる無視であったのは言うまでもない。

そして、佳山に関しては、起こせと言われて、近くの生徒が起こそうとしたのだが、ゆさぶつても起きることもなかつたし、教師が教科書の角で思いつきり叩いていたが、起きることはなかつた。そのときの音は、起こすための音ではなかつた。そう、言づならば、ハンマーを振り下ろしたときにするような鈍い音。

そんな音がしたら、頭が生きているかどうか疑うものだが、明いわく何度もやられているが、問題は出でないらしい。

こんな状況だけを見れば、唯が一番いじょうに見えるのだが、朝ののような毒舌やらなんやらがあるから、結局だれがまともとか言つことは出来ない。

そして、四時間目が終わつたわけだが、それははある」との始まりを指し示していた。

ランチタイム。それは、学食の先着三十名だけが食べられるという限定メニューを争う、いわば、戦争。

チャイムがなつた瞬間、走り出す生徒、ドアは大きい音を立て開けられて、無論、そのまま。

そして、その真つ先に飛び出していく生徒には見覚えがあつた。

佳山明彦。午前中四時間全て寝ていたと言うならば猛者だ。

彼は、運動が嫌い、いや、精神的に拒絶していて、体育も無理だ。なのにも関わらず、あの戦いで負けたことはない。

おそらく、彼にとって、午前中の授業は、昼の戦に向けての休息

なのだろうが、それは、学校に来る意味として本末転倒と言つものなのだろうが……。

まあ、実際見てみたことがあるが、確かにこの戦いは激しい。それはもう、かなりの体力を消費し、怪我まで生むことがあるほど。生徒によつては曲がり損ねて壁に激突しているやつすらいる。そんな感じではなくても、メニューの注文の際は、完璧なる押し合いで。

それは、まさに力ある者のみがメニューを手にすることが出来るというものの。

そんな怪我とか激しい体力消費が見られるなら、メニューを限定数ではなくて、無制限にしろよという話なのだろうが、実際にそれはやつてみたらしい。だが、それをした瞬間、客が激減したらしい。人がいたらまだましだろうが、客は0になつたらしい。

それでは、食堂が成り立たないということで、結局限定数にしたままらしい。

そんな裏事情を聞いて、どれほどのか確かめるために、一年の頃、その戦に参加したこともある。だが、あれには、どうやっても勝てる気はしなかつた。

生徒はこれを何かのスポーツもしくは競争の一環として行つているのではないかと思われている。

それに対し、俺は・・・もちろん参加しなかつた。

「まあ、ご苦労なことだ」

そう呟く俺は弁当派だ。今となつては、そんなめんぢくさい競争のために、体力を使う気もないし、何より、そんな食堂メニューよりもおいしく決まつていい麻利の料理があるのでから充分だった。さて、どうしようかと周りを見渡す。

俺の友人たちは、佳山は走つて行つたし、明は何か組み立ててるし、唯はそんな兄貴を上目遣いで、ずっと見ている。

どうやら、だれも食べるような相手がいないようだ。

「なら、屋上にでも行くか

そう独り言を呟いて、弁当もつて、廊下に出ていった。

開きっぱなしのドアを出て右に曲がり、真っ直ぐ進んでいく。その突き当たりをまた右に曲がって、見えてきた階段を上つていく。そうしたら、見えてくる扉を針金という名の鍵を用いて、オープンする。無論、正規の鍵などもついているわけがない。

俺は学校の教職員に関係者がいるとかそういうのではないのだがら。

そうして、入った屋上は太陽の日差しが気持ちよかつた。といふこともなく、暑いぐらいだつた。

だが、吹き抜けるそよ風によつて、そんな暑さは消えてしまう。そんな快適な場所で弁当を食べて、寝るのがすごく好きなのだ。

「先輩、今日はお早いですね」

食べよつと思って、弁当のふたを開けたとき、ふいに声をかけられた。声の主はわかっている。

「やあ、麻利」

「こんにちは」

それは偶然の鉢合せではない。晴れた日は大抵こうなる組み合わせだつた。俺は気持ちよく寝ることが出来るここが好きで、彼女はここが快適だからと言う理由で、来ている。

実際、彼女をここへ俺が誘つたわけでもないが、自然と来ているような状態だ。

俺はあいさつをかわすと、箸を取り、弁当を食べ始めた。

「先輩、あの試作品、ありがとうございます」

「いや、気にするなよ。でも、あれはまだ試作品だ。もっと、使いやすくしてやるから待つてろよ

そう、あれは試作品。普及させるには、まだ早い。燃費の悪さ、個人の保護、セキュリティ、他にもまだ問題点はある。

あれは、形ができる、成果が得られただけの初期段階。

「楽しみにしてます。でも、今日のよつて無理はなぞりないでくださいね」

「ああ、分かつてゐよ」

今日。つまりは、夢中になりすぎて、寝るのが四時になってしまつたこと。自分が感じる限り、そこまで無理をせでいる感じもない。

だが、それは表面的なもので、疲労といつものは蓄積されていくもの。

気をつけなければ、改めてそう思った。

「そう言って、無茶しているんだから、困るんですけどね」

「ハハハ・・・」

笑うしかなかつた。以前もこんなことを思ったことが合つた気がするが、結局このままだ。あまりにも、俺の性格が見抜かれていて、何ともいえない感じ。

だが、それは二人が過ごした時間の長さを示していると思うと、自然と、嬉しくなつていつた。

そういう話していくうちに、俺は弁当を食べ終わり、麻利は俺に比べると少しだけ遅れて、ランチタイムは終了した。

「ここ気持ちいいし、俺は寝ることにするよ」

「ふふつ。いつもどおりの先輩ですね」

「久々のここだからな。あと、今日は先に帰つといてくれ

「はい、わかりました」

先に帰つておいてくれというのは、俺が軍からの仕事をするという意味を指している。そう、それは、長年の付き合いだから成り立つ会話。

彼女はそれを分かつた上で、返答をしている。

「気をつけてくださいね」

「ああ、大丈夫さ」

そう言って、俺はそのまま背中を後ろに転がして、寝転がると、眠りについた。

## 破られた均衡

そして、俺は毎休みの終わりを告げるチャイムとともに、目を覚ました。彼女の姿はもうない。それはいつもどおりのことだった。彼女はクラスの委員長。担任がいていないうな存在である代わりに、彼女のようなクラス代表が配布物等を配つたりなど、仕事をしているのだ。

それは、この学校の生徒を主として、教師はなるべく介入しないというこの学校の性質を代表する一角だ。

他にも、執行者と呼ばれる一学年に三人の選ばれた生徒による九人会と呼ばれる生徒会の実施。そこで、普通の授業以外のことなら、ほとんど決めることが出来る。

そういえば、そろそろ、選抜だつた気がする。とは言え、俺には関係のないことだ。

話を戻すと、はっきり言つて、ここは生徒が主権を握つている学校なのだ。

だが、それでは、教師の意味がかなり減つてるとこになるではないかと他の学校に行つている友人に言われたことがある。

そうは言つものの、教師という存在はその字の通り、教える師であり、言つてしまえば、授業以外は必要ない。

それにより、教える以外しなくてもいいことによつて、自由になる時間は、個人の研究に用いて、成果を挙げることがこの教師でいるための条件とされる。

だから、この学校には、世界的に有名な学者となつてゐるような教師もいるのだ。

それにより、教師のレベルを高め、授業のレベルを上げるそれが学校の狙いだ。

教育の向上のために、最低限のこと以外は省いた仕事しかしない教師、それを補うようにして、権力が与えあられ、負担が増えた生

なんというか、皮肉のようにも感じる。

教育の向上が目的で、何故、生徒にかける負担を増やすのか、それは本末転倒な気もしたが、長きに渡る学校の方針のようなので、変わることもないだろつ。

そんなことを思い返していた俺は、もう一度空を見る。

「きれいな空だ」

そう言って、手を伸ばす。だが、その手は届くことはない。どんなに願つても。

そして、しばらく空を見つめていると、携帯がバイブしていることに気づいた。

それは、メールの長さではないコールだ。だが、こんな授業が始まる前に誰だろうか、そんな疑問を抱きながら、携帯を開く。

そこに書かれていた名前はない。ということは知らない人、もしくは登録していない人と普通は思うだろつ。

だが、俺には、その時点で、相手が誰か、すぐに分かった。

「もしもし」

「私だ」

それは、大佐の声。通信が傍受されてしまった際に発信源を突き止めるのを防ぐために行う電話番号の改ざん。

そして、全てのネットワークが介入できないような、無線電話の回線の生成。それをするために、電話のたびに変わる番号なのだ。

「大佐、今日はどうなされたのですか?」

「私たち、軍部に何者かがハッキングを仕掛けてきた」

「本当ですか、それは」

「ああ、それで、北井大尉の方は大丈夫か」

「ええ、実を言うと、こちらも襲撃を受けました。それも、相当の手練だと思います」

俺は何事もないように冷静に回答したものの、内心では驚いていた。そう、俺のところを襲撃してきたというのは、まがいなりにも、

一般で使っているのだから、まれに起きるのは理解できる。

そして、軍が襲撃を受けるのも、まだ、可能性としては理解できる。

る。

だが、その襲撃が同時期に起ころうのは、明らかにおかしいと思つたのだ。

「こちらにも、そのとき、その現場にいたやつがいたから、一命を取り留めたが、何件か突破されしまつた」

「すみません、俺がいないばっかりに」

「いや、気にするな。大尉は、帰つてよかつたのだから。だが、それでも、あいつは結構なやつだったのだがな」

俺にその事実は更なる驚きを与えた。あの軍には、俺の自宅に完備している自作防衛プログラムの一世代前が置かれていたのだ。最新のものは、出来たのが、つい最近だつたのと、バージョンアップには時間がかかることがあつたため、やつていなかつたのだが。それでも、充分、並みのハッカーや俺の家にハッキングを仕掛けてきた彼なら余裕で潰せるほどの強固なものだつたはずだ。そして、プログラマーなしで、その性能のものに、きちんと人が付いていたのだから驚いているのだ。

「だれですか。そのときの担当は」

「草薙だ」

「やつほどの腕がありながらですか」

彼は俺が認めるほどの腕の持ち主だつた。プログラマーとしては、D言語と呼ばれるプログラミング言語の開発を行つたことで、一躍有名となつたことで、知られるほどの人物だ。

その言語の主目的は、ハッキングやウイルス等から、守る。つまりは、ディフェンスのDをとつたらしい。

それを見させてもらつたが、面白い要素が結構あつて、興奮させられたのを覚えてる。

性能に関しても、問題はなく、俺も突破するのにほ苦労させられた。

そんな彼が、いながらだと・・・。

「ああ、そうだ。さすがに、驚かされたよ。大尉の防衛プログラムがあり、彼がいながら、突破されるなど、想像も出来なかつたからな」

それは、完璧な計画的犯行。おそらく、俺を襲つたのは、俺を家の方に集中させて、出られない状況を作るため。

そう、そのハッキングに対する防衛の要請が来たとしても。

「そういえば、何故、防衛の支援要請を出さなかつたのですか」「すまない、それはこちらの判断ミスだ。いつものように、草薙と

セットなら大丈夫だと思っていたんだが」

「そうですね、彼と俺のプログラムがあつたなら・・・」

それは、冷静な大佐が見せた久々のミス。だが、そこまで、気にしてはいなかつた。

なぜなら、要請を受けたところで、結果は変わらなかつたのだから。

「過ぎたことを気にして仕方のないだけです。今、何をするかが重要です。大佐にお頼みしたいことがあるのですが、よろしいですか」

「何だ、大尉が私に頼みごととは」

「異能の保持者が集まりつつあることに関しています。大佐は、近頃各地で起きている落書きのことをご存知でしょうか」

「ああ、知つているが、それがどうした」

「あの文字は見たところ、魔法文字の一種と思われます。おそらくは、魔法使いの血を持ちながらにして、魔法使いであることをやめた者が、使用する文字で、亞種だと思われます。ですが、私にはその意味が理解が出来ませんし、俺の任務とずれてしまつています。よろしければ、調べていただけないでしょうか」

「ああ、いいだろう。それは、本来、我々が調べるべき、今回の一件の原因に繋がりそうだからな」

それは、俺には理解でかつた文字。そして、調べるには多大な時

間がかかつてしまいそうな事柄。だが、俺には、それを頼める人がいる。

それを俺は幸福だと思った。

「ありがとうございます。では、失礼します」

「ああ、ではな」

それを最後に俺は、電話を切った。さすが、大佐だ。誰もいない俺が一人のときを狙つて、電話をかけてくるとは。

だが、これで、何かが組織的に動いているのは確実なものとなつた。あとは、その尻尾を掴み、目の前に引きずり出してやるだけ。「さて、そろそろ、俺も真面目に動くとしますかな」

一言だけ呟くと、俺は扉を開く。だが、その先にあるのは階段ではない。

そこはそう、自分の部屋だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2304w/>

---

俺と世界と電視の力

2011年11月23日21時55分発行